

文月 悠光

詩部門には三十七作の応募がありました。数が増えたこともあり、昨年と比べて応募作全体のクオリティが高く、非常に読み応えを感じました。選考中、私が実感したのは、詩の言葉だからこそ、身近な人は伝えられない真実を描き、作中で打ち明けている応募者が何人もいたことです。そういうった作品を読む時間は、嬉しさと共に、こちらもきちんと受け止めねば、という緊張感を感じました。昨年との変更点は、賞全体の方針で佳作を選出しない方向にたことです。一方で、受賞作以外の応募作の中にも、作品集の掲載に耐えうる作品が複数あつたことも記録しておきたいと思います。しかし、その中でも、なぜ次の二作を選出したかといえば、他の作品に比べて、自分の表現したいもの・しなければならないものを持つていて、且つ、表現する術をすでに獲得していたからです。「敢えて作品にしなければ、人に伝えるのが難しいこと」に向き合い、そこの人の答えを出させているか、選考ではその点を重視しました。

最優秀賞の水井大翔さん「おおきなもの」は「小さな自分」に着目して語り始めます。小さな自分だからこそ、自分の知り得ない「おおきなもの」への欲望や衝動を抱えるのです。語りのテンポも変化を拡大し、それと共に、文字のレイアウトにも空白が生まれていきます。そのように言葉が膨らんだり縮んだりする様を楽しみ、自在に操ろうとする。ここには表現欲と、言葉をコントロールしようとする歓びが満ちています。詩らしくまとめよう、という意識がはたらく応募作が多い中で、本作はシンプルな内容を生かしながら、書き方でここまで豊かに見せることができている。その発見をとて、も新鮮に感じました。

優秀賞の林茉里香さん「貼られた付箋」は、他者へのレッテルやラベリングの問題をまつすぐに見つめています。答えの出ないものに付箋を貼ることによつて「平穏」を得ることもあれば、望まない形で「自分を説明されて」しまうことへの葛藤も生まれます。その目は語り手「私」自身にも向かれられ、親友に「付箋」を貼つてしまつた出来事を振り返ります。一度貼られてしまつたら、剥がすことできな付箋。その貼られた付箋の痛みを背負うべきなのは誰なのかで貼つた人か。貼られた人か。読みながら、深く心を抉られる。一篇でした。